



Japan Design Space Association

一般社団法人 日本空間デザイン協会

DSA 関東支部

「情報ポスト」

2013年 8月号
VOL.001-1空間 デザインホットニュース
NEWS

2013年最初の情報ポストです。
遅くなりましたが、1月に開催いたしました「年頭セミナー」のご報告と6月開催「空間デザイン賞審査」のユース会員によるレポート。また、青少年育成委員のテレビ出演など、盛りだくさんの記事でお届けします。
会員の皆様からの記事の投稿もお待ちしております。
お問い合わせは事務局まで。
よろしくおねがいたします。

青少年育成委員会の活動紹介
テレビ神奈川「佐藤しのぶ出逢いのハーモニーⅢ」出演！！持木慎子
柳瀬勝彦

今回の番組出演は、DSA協会山本理事のご紹介により実現しました。初めての打ち合わせでは、たまたまスケジュールが空いていた、柳瀬委員と持木がお話を伺いました。お話が進むうちに、プロデューサーの寒河江様より「2人のコンビが面白いから今回は特別に2人で出演してください！」との依頼があり、2人での出演が決まりました。13年目を迎えた「佐藤しのぶ 出逢いのハーモニーⅢ」では、佐藤様の別荘に出演者が遊びに来るという設定です。佐藤様は、とても気さくな方で、収録の合間には、自身の娘さんのお話も含め、母としての会話も弾み、収録である事を忘れてしまうほど楽しい時間でした。現代の子ども達に、親として大人として何が出来るのかなど、青少年デザイン育成委員会の「デザインがっこう」の話を含め、お話しする事が出来ました。また、視聴者からのアンコールリクエストにより、大きな反響があったとのことで、再放送が決まりました。9月16日(月)午後9時から再放送の予定です。



メーキャップ中の柳瀬会員



新規会員紹介 (2013年度に入会された方をご紹介します)

NEW F A C E

湯浅 忠
株式会社 乃村工藝社
CC事業本部

目に見える所も見えない所も、デザインできたらって思います。

中北友佳里
株式会社 博展
クリエイティブ局

人の心を動かせるようなデザインを目指します。

年頭セミナー

「受賞作品から空間デザイン発想をさぐる」レポート

協会名称変更後の最初の記念すべき空間デザイン賞2012では「エコ」をテーマとした数多くの受賞作品があったことが大きな特徴の一つとなりました。空間デザインとしても重要な示唆を含んでおり、これらのうち複数の作品に携わったアートディレクターのお二方から、「エコ」と「空間」の双方の視点で語っていただきました。

吉永氏から紹介された受賞作品
「2011 "FAIRWOOD PARTNERS & NOMURA
ブース”
「かわさき宙と緑の科学館」



特に短期の仮設展示空間については「エコ」のテーマに対応できるよう商品を徹底的に理解し、省資源・省エネルギーの実現のために熟慮を重ねてきた作業であることが理解できました。

また展示前の準備だけでなく撤去後も商品や展示部材などが再利用されるストーリーもあり、継続的なエコプロジェクトとして位置づけることの重要性が、完成写真からは読みとることが難しいポイントとして紹介され、そのデザインの深さを新たに知ることができました。

「FAIRWOOD」では商品である角材約2000本を吊し、一見無機理的とも言える空間構成となっていますが、その抽象性ゆえに自然の森の環境を想起させる見立ての効果を感じることができました。その角材の一つ一つには伐採地の森林・環境に配慮した木材の使い方・その後どのようにリユースされるかなどの多様なプロフィールが記されており、好ましい木と人間との関わり方が空間から伝わってくるブースデザインとしていました。

開催日：1月23日(水) 16:00~17:30
会場：東京ミッドタウン・タワー5F
インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター
講演者：株式会社 乃村工藝社 吉永光秀氏
株式会社 博展 南 正一郎氏
進行：稲垣 博

南氏から紹介された受賞作品
「エコプロダクツ 2011
”サントリーブース”
「エコプロダクツ 2011
”ハイコーン・ジャパンブース”」



「サントリーブース」は2種のペットボトルがそれぞれに集積されたボリュームがメインの展示。透明で消え入りそうであるがゆえに存在感を高める作用を示し、空のペットボトルでありながらも水が持つ潤い感を感じさせるなど、無から有を感じさせるという高い演出性を示していました。具体的な情報については映像のみに集約するなど、徹底したミニマルデザイン発想をもとに100%リサイクルブースを実現した点が印象的でした。



更に吉永氏、南氏の相互ディスカッションでは、空間全体やブースの有り様そのものから語りかけるというメッセージ機能の重要性が述べられました。このような空間をコミュニケーションメディアとして捉える考え方は、当協会が目指す独自性を印象づける言葉としても読み換えることができるように思いました。

以上、年頭の賀詞交換会の前に行うという実験的な試みとなるセミナーでしたが、100名近い皆様にご参加いただき盛況のうちに終えることができました。この紙面をお借りして皆様に感謝を申し上げます。



Japan Design Space Association

一般社団法人 日本空間デザイン協会

DSA 関東支部

「情報ポスト」

2013年 8月号
VOL.001-2

会員からのメッセージ

M E S S A G E

-ユース会員が本音で語る！-
空間デザイン賞審査会を見学レポート

今年も6月1日～2日に空間デザイン賞の審査会が行われました。今回は審査会を見学したユース会員の皆様からレポートをいただきました。これからも、よりよい審査会としていくために、このように若いユース会員の方々のご意見を真摯に受け止め、審査を運営する協会として努力を惜しまず、変革を恐れず、進んで行こうと決意を新たにしました。ぜひご一読ください。

株式会社資生堂
小林恵理子

長い論議の中、審査員の方々の一言一言が空気を変え賞が決まっていく様子には緊張感がありました。新しいデザイン性を重視するのか、企画重視の空間が生む社会的影響や挑戦を重視するのか。ただでさえウィンドウディスプレイやイベント空間、公共施設、ミュージアム…などカテゴリーの違う空間が同じ土俵に集められ、議論される切り口が異なる中で賞という答えを出すことは難しいと感じました。実際その空間を体感しているわけでもなく A3 サイズの切り取った写真と 250 字の文章で伝わりきらず、その空間表現や考え方などを審査員が推測する場面もありました。出品していた自分としても、もっと情報の載せ方に気を使わなければならないと感じました。普段空間デザインの領域だけにとどまらない外部の審査員の評価も貴重で参考になり、あらためて空間デザインという言葉が示す領域の広さを実感しました。

株式会社 乃村工藝社
清水良輔

審査会を見学して(1次のみ)、特に私が感じたことは、実際の空間を、写真と 250 文字の文章だけで審査するのはとても難しいということでした。プレゼンボードに実際の使われ方がわからない写真(商業なのに商品がない状態の写真・ものための空間なのに子どもでにぎわっている感じが写真等)が使われているものが多く、解釈や評価が難しく見えませんでした。そのため、プレゼンボードにおける表現力・写真の選び方がいかに大切であるかということや、空間の持つ面白さは、人が使うことで初めて魅力が出るということを再認識することができました。また、様々な視点からの評価はとても面白く、デザインの新鮮さという面だけでなく、社会性やソフトな面なども合わせて評価していたのは、時代性をよく表しているのではないかと感じました。

株式会社 フジヤ
高井直樹

空間デザイン賞審査会の見学に参加させて頂き、感じた今後の審査会に対する希望を述べたいと思います。まず、審査における白熱した議論は非常に参考になりました。しかし、多くの応募者はこの審査の過程を知ることなく結果だけが知らされます。これでは延ばすべき点、改善すべき点が不明確で今後のデザインの活かされないのではないかと、思いました。実際に「前回までのデザイン性は良かったのに、なぜ変えてしまったのか?」という意見も耳にしました。これはまさに、どこが評価され選ばれたのかが伝わっていないからだと思います。この解決策として、応募段階で「審査員によるコメントを希望」等の項目を設け、希望者のみ審査の講評が伝わるようにする。“希望者のみ”とした理由は、全作品に対してコメントするのは審査員の方の負担が大きいと考えたためです。“作品を応募し、結果のみを知る”という一方通行の審査ではなく、“評価を知る”機会を設けた相互作用のある審査になっていければと思います。

株式会社 博展
大和 嵩

DSA 審査会を一次二次審査と 2 日間見学させていただきました。随所で様々な驚きや考えさせられる場面があり、特に二次審査にて「DSA として何を大賞に選び、どんなメッセージを発信するのか」という白熱した議論は、誰もがその議論を注視し、考えさせられた場面であったかと思います。今回大賞だった JP タワー学術総合ミュージアムをはじめ、今年度のディスプレイ年鑑を手にとった読者が、審査結果からどういったメッセージを感じ取るのか、非常に興味があります。個人的には、IT 社会の中で、リアルな空間体験に価値を見出す読者が増えれば、デザイナーとして幸せに感じます。最後になりましたが、審査に携わった皆様、誠にありがとうございました。

株式会社 ムラヤマ
深澤 美香

今回、初めて DSA 審査会に参加させていただき、まず率直な気持ちとして、これだけの圧倒的な作品数を一度に見ることが出来ることができ、「デザインでおなかが一杯になる」という実感を初めて体験させて頂きました。昨年度より、DDA から DSA という立ち位置に変わったことで、よりデザインの領域が広がり、今までの意匠やマテリアルだけのデザインだけではなく、場所性、存在意義、メディアの使い方等も含めた提案が求められている中で、空間でのコミュニケーションの取り方、訪れた人へのメッセージがしっかり提案されているものが、今年度の上位作品の特色であったのではないかと感じています。今回の貴重な体験を通し、空間デザインに携わる者として、「伝えるべきメッセージ」「コミュニケーションの取り方」を、デザインという「手法」を用いて、構成していく力を身につけるべく、日々精進していきたいと思っております。

株式会社 丹青社
渡部由香

2 日間の審査会見学を経て感じたことは、全てにおいて「芯」と「魅せ方」が大切だということです。作品(商品)の良さを、A3 数枚のボードにまとめ、しかも空間のデザインを写真と文字のみで伝える。この制限により、実際は素晴らしい空間かもしれないけれども、そのボードだけでは伝わりきらない。そんな作品がいくつもあったように感じました。一つの空間を表現するとき、コンセプトから始まり、そこから空間構成や素材、空気感…など、様々な要素を組み立て形にしていきます。そこで大切なのは、“一本芯の通った魅せ方”であると考えています。どのような見せ方であっても「芯」のあるデザイン(考え方)であれば、その作品に対し魅力を感じられると思います。